
神々の八つの宝玉

須崎杏子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神々の八つの宝玉

【Nコード】

N8658C

【作者名】

須崎杏子

【あらすじ】

アルウという怠け者がいました。神さまの孫で、運動神経がいいのです。そして宝玉集めの対象となりましたが……。

プロローグ 宝玉集めの始まり

「なんだと!? また玉が盗まれた?!」

「はい、こんどは火の玉です」

「これで三つ目だぞ!?」

「はやく犯人をさがすのじゃ!」

ここは天空会。あるものだけができるといわれている。いつもは静かだか、ある事件について騒いでいた。

「雷と草もなくなるというのは非常に危険だ! 急ぎ玉の搜索を!」

「こうなったら誰かを出すしかありませんね」

風もざわめく。

「そうしたらわしの孫のアルウをだそう……」

「それはいい!」

「それじゃあわしはアルウを探しにいつてくる!」

天空会では大変声が響いてきます。

ギャンブル

「ぎゃはは! やったぜ! これでゲームが……」

人間界のところで騒いでいるものが一人。しかし背後から誰かが背中をつかむ。

「なにをやっているのじゃ? のう? アルウ? 人間界に降りてはならんとあれほどいっただろう?」

「うわ! おじいちゃん!」

「え? この神様が!?」

隣の友達がいった。

「このまま天空界へと戻るぞ」

「おーい、助けてくれよ」

ずるずるとアルウを引きずり、ギャンブルを出て行く神様と弱気な声をだすアルウ。しかし、友達の反応はというと……。

「ご、ごめん。神様に逆らうことはできないや……」

「この裏切り者く！」

神様には逆らうことは許されないので。このままアルウは天空界へと戻っていきました。

「なぜ人間界へといったのじゃ？」

「だって、ギャンブル楽しそうだし、ゲームかえるし」

そんないいわけをして逃れようとする。しかし神さまはするどい。

「のう、アルウ。なんたって天空界からでたのじゃ？ たしか「地獄界へと行かなきゃ行けないことがあるから出かけてくる」とかいったじゃろう？」

アルウはゾーっとする。

「ごめんなさい。なんでもいうこと聞くからお小遣いだけは減らさないで」

「ほう、なんでも聞くといったのじゃな。それじゃあもう、異世界へいって」

「五つの宝玉を集めよ！」

「なんで五つ？ なんのことかさっぱりわからない」

「ぜんぜん何も聞いていないのですた。」

「神々の宝玉といわれている宝玉は、八つあり、それぞれが人間界のバランスをたもってるんじゃ。神の力を込めた宝玉で、それが今、盗まれておるんじゃ。じゃから、犯人を捕まえてほしいのと、全部盗まれる前に宝玉をわしのもとへと戻してほしいんじゃ」

長い長い話をおえ、アルウのすがたを見て、こういった。

「寝るなー！」

「ふえ！？」

びっくりした。

「聞いておったか？」

「は、はい」

「それじゃあ行けい！」

「はい」

このとき、アルウは何でも聞くといいたのをあとで後悔しました。

第一話 変身薬

「異世界へいくのじゃー！」

「うーん、そういつてたけどなんか異世界って感じがしないなあ」
いまアルウがいる場所は長い長い草原。それを歩いていく。

「ま、めんどくさいし、そこにちょうどギャンブルがあるからいいと」

そして中へいこうとしたらいきなり雷が発生した。

アルウをめがけて。

「ギャー！」

アルウは黒焦げになった。上から声が聞こえた。

「何をやってんじゃ！ いまはギャンブルどころではない！ はやく宝玉をあつめい！」

神様の声だった。

「は、はい」

プスプスと煙を立てていた。

「へー。ここが水をつかさどる宝玉がある場所か」

扉を開けたら人魚がいた。しかも下に階段があるけど上には階段がない。

「……だれですか？」

大きな魚がいった。

「ここ通ってもいいですかー？」

そういうと魚は笛を取り出し、吹くと小さな魚が出てきた。

「人間は大変汚れてます。この清い水中の中には入れるわけにはいけません」

そういうと魚は攻撃してきた。学校の外に追い出した。

「いってー……なんだよ。いれてくれねえじゃねえか」

アルウはどこから視線がぶつかっているのかすかに感じた。

「……やっぱいないか」

そういっておしりについた土を払い、天空界へともどった。

「ふふ。入れてもらえるにはそうすればいいのね——」

怪しい影がひとつ。どこかへ消え去った。

「おお、早いもう。もう集められたのか？」

「……やっぱやめる」

「なんでじゃ？」

「いれてもらえないからじゃんか」

そういってベッドに寝そべる。

「ああ、忘れておった。老人は何か忘れてしまうからのう」

笑いながら液体が入った小さなビンを取り出した。

「なんだ？ これ」

「それはのう、材料と混ぜ合わせたら完成するのじゃ。魚になったりと自由自在じゃ」

「ふーん」

光を放った。

「ま、どんなものを使えばいいんだ？」

「それはのう、いきのいい魚を使えばいいんじゃないよ」

という。そのとき、アルウの手からビンがすべり落ちた。砕け散った。

「ノー！ これじゃあ変身できないじゃないじゃ！」

あわてて何かを探す。

「ごめんごめん」

そういいながら心の中では「よかったぜ」と聞かせていた。

「その液体の材料となるものを探すんじゃ！ お前の責任じゃ！」
そういいながら紙を押し付けた。

「えええええ!？」

「お前が落としたんじやろう? 早く行くのじゃ!」

そして床に穴が開いたと思うと真っ逆さまに落ちていった。

「うわああああああああ」

「いってー」

またもやしりもちをついた。

「なんだよ、あのくそじじい」

紙を見ながらいう。

「エーと、茶路木の金の葉? どんなんだ」

アルウは周りを見回した。なんと木が動いている。

『人間が下に落ちた』

『好都合だ、食べちゃおうぜ』

根っこがアルウの足元へ向かった。

「これってこれってもしかすると……」

足を引きづられる。

「やばいの……か?」

木の口元へ入っていく。

「助ける! くそじじい!」

あっというまに口の中に入ってしまった。

「ギャー!」

「……おいしー?」

口をあけると甘い味がした。

「はち……みつ?」

アルウは状況が理解できない。そしておくのほうには巨大な蜂の巣がある。しかも人間のように大きい巣穴。

『われわれの巣に進入するとは愚かなり……』

蜂の目が光ったと思うと巨大な針を向けてきた。

『覚悟!』

「まてまてまて! 被害者はこっちだ!」

そういうと聞き入れてくれた。

「おれはなあ、この木に飲み込まれたんだ。どうにかしてくれ」

そういうと蜂はどんどんまして来る。

『嘘かどうかはつきりしない。しかしわれわれのすを壊した事ははつきりとしている』

アルウは足元をみると巢の一部が見事に崩れ落ちてた。

『やはり悪者だ』

『やっぱりこの木は悪くない』

『茶路木よ、なけ』

ひとつ、なくと木が鳴き始めた。

『グオオオオ!』

木の中で響く声は気高い王のようでもある。

「耳がつぶれる前にっ」

耳栓を取り出した。いぜん、ゆっくり眠れるように強力な耳栓をつけるようにしていた物だ。

「へへ、どうだ。これで聞こえないぞ」

蜂の方をみたら蜂はよろついたり気絶したり。木の影響が大きかった。

『くそっ。うろの中では威力が大きいことがわかっていたのかっ…
…!』

「?」

ぜんぜん聞こえないアルウはなんといっているのかわからなかった。木から出ようとする蜂蜜が覆いかぶさる。

「甘いけどねばねばするっ」

しかしそれがつるつるしたうろから出るきっかけになる。

「お」

ぜんぜん上までいけなかったが、蜂蜜が全身にまといつき、ねばねばで上までいけた。

「おお！」

こうしてうろから出られたアルウ。しかし材料はまだもらってない。

『うぐっ。出てきたのか……』

くやしそうにいう茶路木。

「わるいが、金の葉もらうぞ！」

茶路木の頭には金の葉があった。頭に上ろうとするが、木が動いてできない。

「うおっ」

『われは生き物であるのと同時に木だからな。そんな簡単に取らせはしない』

「そんなこというんだったら剣で……!？」

腰にあった剣がなくなったのだ。今頃木のうろの中にある。

「……よーし！」

『無理だな。口を閉じればいいことだ』

思い切り口の中に飛び込もうとしたが、口が閉じてしまったので顔面に思い切り当たった。

『くはははは。バカだな、お前』

本当にバカなアルウはどうすることもできなかった。

「オレはバカじゃねえ！」

『じゃあどうやって剣をとるんだ?』

「じじい! 戻りたいから戻らせてくれ！」

そういうと神様、いやアルウのおじいさんがきた。

「無理じゃな、アホな孫はいらん！」

「え!？」

「材料を集めるまで無理じゃ！」

そういつてアルウを見捨てた。

『頭使えば簡単なことなのにな』

「とりあえず焚き火でもしようか」

『……』

「寒っ」

アルウは茶路木の枝をとり、焚き火の準備をした。

『あほバカボケなお前は俺の倒し方を知らないからなー』

「なんだと!？」

火がついた木の枝を投げつける。すると一瞬のうちにして茶路木が燃えたのだ。

「あ! そうか!」

『ってわからなかったの!?!』

アルウのバカさに心配してしまう茶路木。

「さて、金の葉っぱもろうよ」

その時気がついた。金の葉っぱも燃えていたこと。

「あー!!」

『うぐう』

「ま、たくさんいることだし。剣取り戻せたからなー」

キラリと目を光らせる。

『え? え?』

「さっきまでバカバカ言われてきたお返しだー!!」

『うぎゃー!!』

こうして金の葉っぱを手に入れました。

「お次は魚か……」

川の中に飛び込むと歯がするどく尖った魚に食らいつかれてしまった。

「いででででで!」

川の中から飛び出すアルウ。しかしまだ魚は手に食らいついている。

「アルウ!」

急に神様がまいおりてきた。

「このまま戻るぞ!」

こうして無事ではないけど戻れました。

でかいでかい水槽がしたから現れた。

「……どうやって用意した？」

「水の神からじゃ」

「じいちゃんの地位は？」

「頂点に立っておる」

そしてダイブした。水が波を作る。

「っっていうよりどうやって戻るのさ」

「……もういっかい飲むのじゃ」

そう、変身薬は一回飲んだら変身できるが、元に戻るにはもう一度飲まなければいけない。もちろんアルウはあの苦々しく、胃がキシリキシリ痛む思いをしなければいけないのであった。

（死ね！）

と思うアルウであった。

「あーあ、服ぬれちゃった」

「なぜじゃ!？」

「じいちゃんのせいだよ、頭ボケすぎたか？」

「トップの位置に付くわしにそういうのかの？」

「ごめんなさい！」

何をされるかわからないので、とりあえずあやまっておいた。

「それより早くいくのじゃ!!」

「あい」

そういつて扉を開ける。

「って人間界の扉をあけるでない!!」
異世界へダイブした。

「うわあああああああ!!」

「ふう、早く持ってきてくれないと困るんですがね」

「今火の神と雷の神が人間界に行ってくれているから大丈夫なんじゃが」

「宝玉をもってくる間に酒♪酒♪」

「お主はアルウか」

そういつて何かを異世界に投げ込んだ。

ボスつとやわらかそうな音をたて、アルウは無事？着陸した。

「ゲフッ!!」

上から小さいのに重いものが落ちてきた。だが、さすが神様の子。無傷でいた。

「……水のような武器？」

ブーメランみたいな武器だった。

「あ、そうか。魚のときにつかえてんだな」

なんとなくちがった使いかたでより早くついた水の城。しかし、もう何も無かった。あるのは大きな穴だけ。

「はあ!？」

中には人間界へいける異次元空間だけだった。

「……宝玉が奪われた？」

宝玉とは。神様が作り出したもの。それを使うことによってその働きをする。なので水の宝玉を奪われたらまずい。

「つていうか変身薬作った意味ねー!!」

そして遠くから「お前が割ったせいじゃー!!」と聞こえた。

「アルウ、反省せえ!」

「えー？」

「もともとといえばお前が変身薬のビンを割ったせいじゃあ!!」

「つていうかさきに宝玉を封じ込めればいいじゃん」

「無理じゃあ!」

そういつて頭にゴツンと殴った。

「いったあゝ。やっぱ年よりは無理するもんじゃないのう」

「いつてー」

そういつて次は花の宝玉をさがしにいくのであった。と、そんな時。神様が何かいった。

「たしかお前は花粉症じゃよなー？」

「……忘れてた」

道を引き返し、地の宝玉を探しにいくのであった。

「あーあ、ギャンブルしたいなあ」

「おーい」

「しかも友達の幻聴まで聞こえる」

「無視すんなー！！」

「がふっ！！」

アルウの友達の智樹。クロスチョップを食らわした。

「ななな、何でお前がいるんだよ！」

「え？　なんか穴に転んだらこっちへきた」

「……（ちよつとどうすればいいんだよおー！！）」

さっき、不要になったブーメランをみる。

「どうしたんだ？」

「いや、それ欲しいなって」

「……百万でどうだ？」

「乗った！」

のるんか。しかも百万って。

「じゃあさき払い」

「いいぞ！」

そしてブーメランは智樹にわたった。

「ああ、ひんやりしていて気持ちいい！」

「ってお前その目的でかったんかよ！」

第三話 盗賊

友達の智樹がそこにいる。これはなにかの間違いだ、そう思っておく

「それにしても本当に異次元ってゆーのがあるんだな」

「……智樹、どうやってここにきたのか？」

一番不思議に思っていたことを聞いてみた。

「ああ、それはな。ちょうど2時間前のことかな」

——二時間前の人間界——

「また金を使い果たしてしまった」

未成年のくせにギャンブルをする智樹

「ん？」

かすかに地面が動き、空がどんよりとした雲に包まれる。

「んー？」

黒き光が川に向かっていった。なにかがありそうだから近くへいってみる。

「ええ！？」

ブラックホールみたいにあいた穴からでてくるのは、なんとおとぎ話にでてくる人魚の大洪水。

「すげえ！」

そういうのも無理はない。人魚たちはつながってでてくるでてる。もうちょっと見ようとすると……

ヒュウー ゴツン！

頭から落ちていった智樹だった。

「うぎゃあー！！」

下はブラックホール。足とかじたばたしても地球の重力には逆ら

えない。しかも他の人からみると笑えるポーズだった。

「ぐへっ」

そこで意識を失った――――

「あーあー、わかった。つまりお前はバカなんだな」

「え……………」

とそういう風にいつていると変な子が現れた。

「おーい！！ 金はないかー？」

「あります」

「ないです」

「ええー！？ 普通そこで誰だ！！ っていうだろう！」

以外にも盗賊は普通だった。

「とりあえず金目の物は無いかな？」

「盗賊は盗賊らしくこそつとやるもんだろ？」

「気にしていることをいうなボケ！」

蹴りを入れた。その間にサイフを抜き取った。

「うふふ♪ お金はもらったわよ！」

そして逃げようとするが……。

「うぎゃあ！！」

なぜか網に入った常態になっていた。

「し、しまったー。さっき張っていた罠で自滅してしまっただけ」

「お、こいつ何か持っているぜ」

「サイフ返してもらうけど、こっちももっていてもいいよな」

お前らが盗賊か、っていいたい盗賊の娘だが、今はそれどころではない。

「じゃあな！」

やっとな網をぐぐりぬけてどこかに去っていった盗賊の娘だった。

「名前は？」

「教えるかボケェ！」

返事が返っていった。

「なにかおちてるぜ」

「俺たちのサイフと……おお!!」

そこにはなんと！ 炎の宝玉が落ちていた。

「つまりあいつは宝玉を盗んだ犯人ってか」

「かわいかったなー」

「気は確かか！ 智樹」

盗賊に一目ぼれの智樹であった。

「とにかく他の玉も盗まれてんだ。ほっとくわけにもいかないぜ」

「……といってあの盗賊に会う機会を窺っているのでは？」

「うっ」

本当に会おうとしているらしい。

「まあいいか」

『そだね』

「あいつ馬鹿だし」

『脳いかれてるんじゃないかってさ』

「うんうん……って誰だ!？」

『やっとなづいてくれたんだー』

そこには妖精もどきがいた。

『いや、もどきじゃないって』

「？」

『いや、テレパシーで』

「なるほど」

嘘つけ。火の宝玉から出てきた妖精らしい。赤髪で童顔な妖精だ。

よくよく見ると女にみえる。

「お前はなんだ」

『炎の妖精だよ。ともかく水の宝玉や雷の宝玉を捜して!』

「お前に命令されるたちはない」

『がーん』

その光景を見ているものが一人いた。
「火の宝玉が取り戻された……。しくじったか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8658c/>

神々の八つの宝玉

2010年10月28日00時44分発行